



化石燃料って、なんなの



大昔の生物が、長期間、地下深くにうまって変化して
できた石炭や石油、天然ガスなどのことさ。

石炭は、大昔の植物からできた

石炭は、けんび鏡で見ると植物の細ぼうや花粉、ほう子などが見られ、植物の化石が混じっていることもあることから、大昔の植物からできたと考えられています。大昔の大森林の木が、水中にたおれたり、こうずいなどでおし流されて水底にしずみ、その上に土砂などが積み重なり、地中深い所でおしつぶされ、地熱で少しずつ熱分解が進んで石炭ができたのです。

石油は、大昔の植物や動物の体が材料

石油は、大昔に海や湖などの底にたまった、プランクトンや海そう、水草、魚やこん虫など、さまざまな動物の死がいなどが、変化してできたと考えられています。

これらは、長い間、土砂の下にうずもれ、地中深くでおしつぶされているうちに、動植物の体内にあった成分が、び生物のはたらきや化学変化で、石油になったというわけです。そのしょうこに、石油の原油には、血の色である赤血球のヘモグロビンや、植物の緑色であるクロロフィルなどからできたと考えられる化学物質が見つかっています。

石油が多く見つかっているのは、中生代(2億4700万年～6500万年前ごろ)の地層ちそうです。このように、石炭も石油も、化石ができるのと同じようにしてできたため、化石燃料とよばれています。



石のようになった木や
貝の化石は、燃えないね。